



呼吸する家

県産材(ラピリ)利用の本当に呼吸してしまう二世帯住宅



「呼吸する家」の建つ仙北市角館は豪雪地であり、屋根の形状を問わずに雪下ろしが行われている地域である。

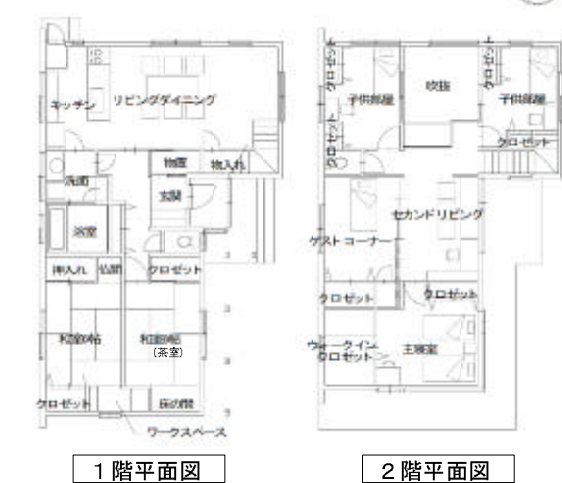
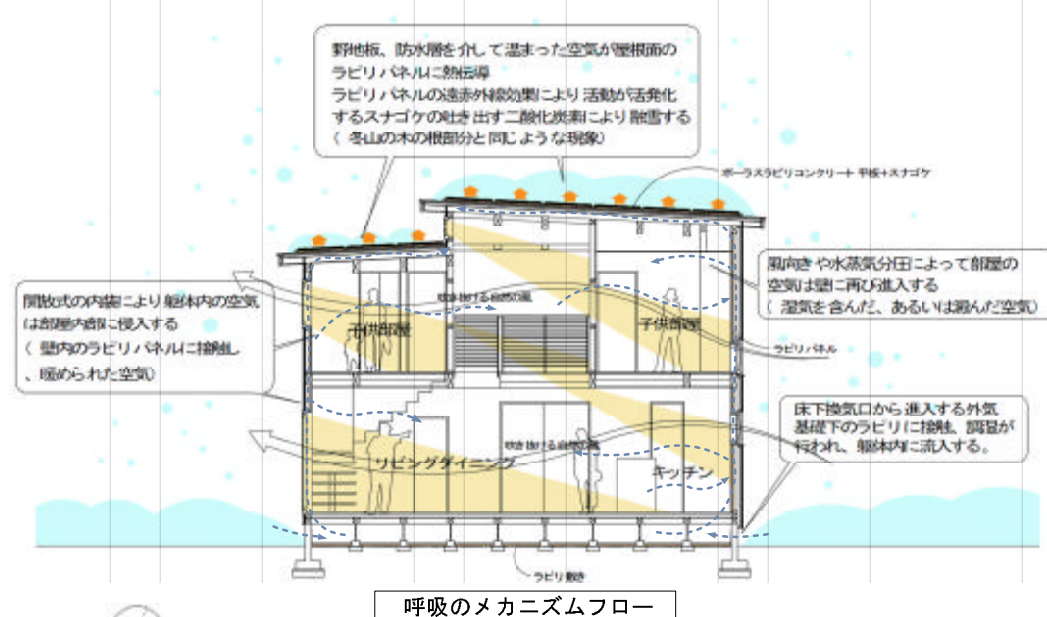
危険性はもちろんであるが費用的な負担も大きく、建替えにあたってこの問題はかなりウエイトの高い問題であった。しかし雪下ろしの不要な屋根は意外な解決を見ることがになった。

家の調湿、空気を清浄化、遠赤外線効果をねらって導入を検討していた県産材のラピリ（火山の爆発によって生じた火山礫）を屋根の蓄熱材とし、その上にスナゴケで緑化、屋根の表層材としこれに建物内に熱道を作り接触させることで遠赤外線効果とスナゴケの二酸化炭素発生を併せて屋根融雪を行うというアイデアに行き着いた。

ラピリは鹿角地域で採掘されており、日本中で取れる材料でありながら透水性、通気性、保湿性、吸着性において秋田県産が建材利用における性能に優れている。

当該住宅はラピリのフルコースとでも言える内容であり、基礎下の調湿、壁内で調湿・断熱、床の防音、トイレの空気清浄・防音、そして屋根融雪と自然素材利用で循環型システムを構築している。

蓄熱能力の高いラピリの外皮は通常の断熱と併せて高い断熱性を有しており、冬は暖かく夏は調湿能力を発揮し快適な室内環境を創りだしている。



住宅はいわゆる二世帯住宅であり、多世帯住宅では重要な世帯間の調整に時間を要したが、設計を通じて非常に仲の良い世帯関係であることを再確認できた事は設計者としての喜びだった。ご家族にとっても非常に良い経験になったようである。

共用部分をたくさん設け、なおかつプライバシーを確保するという課題の克服のため家は多少大きくなったが2階に設けたセカンドリビングの存在は若い世帯に有意義に活用していただけている。

茶道の先生でもある母親の部屋は茶室としても利用可能でここでも世代間交流は行われており、建物としては精神的な隔壁を設けながらも使い勝手的にはその隔壁をあいまいにし「一緒に住む」ことを非常に強く意識させることに成功できたのは設計者冥利に尽きる。

秋田杉だけではない県産材利用に未来への高い可能性を感じつつ今後もこの家で幸せな生活を営めることを期待したい。